

## P-089

## AYA世代にある重度重複障害者の生涯学習ニーズに関する一考察

合田 友美<sup>1</sup>、阪上 由美<sup>2</sup>、平賀健太郎<sup>3</sup>、早野 眞美<sup>3</sup>、  
副島 賢和<sup>4</sup>、西田 千夏<sup>5</sup>、岡崎 伸<sup>6</sup>

<sup>1</sup>千里金蘭大学

<sup>2</sup>大阪信愛学院大学

<sup>3</sup>大阪教育大学

<sup>4</sup>昭和大学

<sup>5</sup>藍野大学

<sup>6</sup>大阪市立総合医療センター

## 【目的】

AYA世代の重度重複障害者は、学業を終え生活スタイルが変化することで孤立したりQOLが低下したりしやすい。そのため、重度重複障害者が安心して地域で豊かに生活できるよう、ライフステージに応じた保健医療、福祉、教育等の支援が求められる。そこで、筆者らは、AYA世代の重度重複障害者が大学という場に通り、アートやサイエンス、テクノロジーやアクティビティについて、4日間にわたり健常な大学生と共に学ぶオープンカレッジを開催した。生涯学習に関するニーズを明らかにし、オープンカレッジの果たす役割について考察したので報告する。

## 【方法】

2023年2月、オープンカレッジを修了した重度重複障害者10名の養育者を対象に、郵送法による無記名自記式質問紙調査を実施した。調査内容は、属性、オープンカレッジの感想、生涯学習継続の意向、生涯学習に取り組む理由で、記述統計量を算出した。倫理的配慮として、研究目的、方法、個人情報保護、参加は自由意志で拒否による不利益はないことを文書で説明し、書面で同意を得た。

## 【結果】

父親2名、母親4名の計6名より回答を得た。修了生の年齢は19歳～27歳、全員が障害者手帳1級を取得し移動支援が必要で、吸引や経管栄養、排泄管理などの医療的ケアがあった。オープンカレッジの感想は、全員が「日常生活をより充実させることができた」「他者とのふれあいや仲間づくりの機会となった」「自身の心身の状態に合った活動ができた」と回答し、8割以上が「自分のやりたいことができた」「社会参加の機会になった」「家族からみて必要な学習であった」「人生を豊かにすることができた」「健康維持・増進につながった」と答えた。さらに、全員が「今後も生涯学習に取り組む予定」と回答し、内訳は「障害福祉サービスの事業所、入所施設での日中活動」が4名(66.7%)と最も多く、取り組む理由は「他の人と交流したり、友人を得たりするため」6名(100.0%)、「様々な経験を通して、成長するため」5名(83.3%)、「人生を豊かにするため」4名(66.7%)等があった。

## 【考察】

AYA世代にある重度重複障害者は、他者(友人)との交流や自己成長、豊かな人生を求め生涯学習への継続参加を希望しており、オープンカレッジでの同世代交流や学習はこれらを充足させる取り組みの一つとなり得る可能性が示唆された。

## P-090

## 重症心身障害児とその保護者の特別支援学校卒業後の生活に向けた進路指導の実践

中山 祐一<sup>1,2</sup>、山崎あけみ<sup>2</sup>

<sup>1</sup>大阪公立大学大学院 看護学研究科

<sup>2</sup>大阪大学大学院 医学系研究科 保健学専攻

## 【背景】

特別支援学校を卒業する重症心身障害児(以下、重症児)とその保護者は、卒業後の環境へ移行する際、様々な困難に直面するため適切な進路指導が重要である。特別支援学校における進路指導は、各学校が作成する手引きに基づいて実施されているが、その記載事項は一般的であり、個別性に富む重症児やその保護者に応じた進路指導の実践は明らかになっていない。

## 【目的】

特別支援学校における重症児とその保護者に対する進路指導の実践を明らかにすること。

## 【研究方法】

2023年3月、関西の特別支援学校1校の高等部1クラスにおいて、重症児と教員を対象に3日間にわたる参与観察を実施した。参与観察では進路指導の場면을観察し、必要に応じて教員へインタビューを実施した。データの分析後、教頭と進路指導部の部長へ進路指導に関する報告書を提示し、結果・分析の妥当性を確認した。調査は所属大学の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

## 【結果】

進路指導として、教員は【連絡帳による生徒の卒業に向けた状況把握】や、【学期末の情報共有会による生徒の進路準備の進捗の把握】を行っていた。重症児が高等部3年生になると教員は【進路先の実習への同行と、生徒と施設の相性の評価】を行い、重症児と進路先をつなぐ役割を果たしていた。教員は二次障害予防の重要性を認識し、普段の教育の中に個別性に合わせたリハビリテーションを導入していた。その内容をまとめた【自立活動ファイルによるリハビリテーション内容の引継ぎ】を行うことで、卒業後も重症児が健康を維持できるよう取り組んでいた。また、卒業後に重症児が利用可能な施設が限られているため、【公平性を担保した進路先の情報提供】を行っており、重症児や保護者の置かれている状況に配慮しながら、進路指導に取り組んでいた。

## 【考察】

先行研究では進路指導の実践報告の不足が指摘されているが、本研究によって具体的な進路指導の実践を明示できた。個別性を反映した進路指導により、重症児とその保護者の学校卒業後の生活の安定につながると考えられた。一方で、医療関係者が進路指導に関与していないことが明らかになった。重症児にとって学校卒業時期は成人移行期という重要な時期である。卒業後の生活を整えるためにも、学校看護師や生活介護施設の看護師等の医療関係者が進路指導に関与することで、包括的な支援体制の構築につながると考えられた。